

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

自己点検評価委員会(令和7年度実施点検報告)	
(責任者名)	沖永 莊八
(役職名)	学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和7年度のデータサイエンス履修者(情報Ⅰと情報Ⅱの両方科目を履修したもの)は1,237人、そのうち単位修得者数1,167人で単位修得率94.34%であった。 全学生が1人1台のPCを用いて、理解度を重視した授業を実施している。また、千住キャンパスではクラス人数最大60名の少人数クラスで授業行っているため、このように比較的高い単位修得率を達成できたと考えられる。さらに、令和7年度からは東京西キャンパスにおいて教員2人体制を導入し、学習者の理解度や進度に応じたきめ細かな指導を可能とした。これにより、授業中の個別支援や演習時のフォローアップが一層充実し、履修者の学習継続や単位修得の支援につながっている。
学修成果	2025年度の数理・データサイエンス・AI教育プログラムは、学生の理解度と学習意欲の両面において顕著な成果を上げた。授業アンケートの結果、講義内容を「よく理解できた」とする回答は30.2%に達し、前年度の23.6%から6.6ポイントの大幅な上昇を記録した。これに「やや理解できた」を合わせると、全体の87.5%の学生が肯定的な評価を下しており、講義内容が概ね適切に浸透していることが示された。 学習の動機付けに関しても進展が見られた。「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」に対する理解度は、肯定的な回答が計86.7%に及び、学生がデータサイエンスを単なる知識としてではなく、自身のキャリアや社会生活に密接に関わる重要な技能として捉え始めていることが窺える。 教育内容面では、シラバスに基づき、情報モラルやセキュリティといったリテラシーの定着から、Excelを用いた統計分析(標準偏差やヒストグラム、最小2乗法の活用)、PowerPointによるプレゼンテーション資料作成まで、段階的かつ実践的なプログラムを展開した。特に、e-Stat等の公的統計を利用した社会調査や、最新のAI活用動向をカリキュラムに取り入れることで、社会の変化や技術の発展に即応した教育を提供した。また、PBL(課題解決型学習)を通じた能動的な学びの場を設けたことは、学生が自らデータを分析し伝える実践力を養う上で極めて有効であった。 また、本プログラムで培った基礎的な数理・データサイエンス・AIリテラシーは、2年次以降の専門的な学習へ円滑に接続しており、学生がデータ活用を踏まえて学びを発展させる基盤となっている。さらに、こうした学修は研究活動、医療・教育・経営・行政等の多様なキャリアパスへの接続にも資するものとなっている。 今後の課題としては、全体的な理解度が向上する一方で、約1割存在する否定的な回答者への対応、すなわち「習熟度の二極化」の解消が挙げられる。全ての学生が教育効果を楽しむよう、提出物への丁寧なフィードバックなどの個々の理解度に寄り添った多角的なサポート体制の更なる充実が求められる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	2025年度の授業アンケート結果によれば、学生の講義内容に対する理解度は前年度と比較して大きく向上している。具体的には、問1の「講義内容を理解できましたか？」に対し、「よく理解できた」と回答した割合が、前年度の23.6%から30.2%へと6.6ポイント上昇した。これに「やや理解できた」の57.3%を合わせると、全体の87.5%の学生が肯定的な評価を下しており、講義内容が概ね適切に浸透していることが示された。 この向上は、授業改善アンケートの結果に基づき各教員がより分かりやすい授業を行ったことに加え、高校での「情報Ⅰ」必修化により、データ活用の基礎を学修済みの世代が入学したことが要因と推測される。一方で、否定的な回答も1割強存在しており、受講生の増加に伴う習熟度の二極化への対応が今後の指導における重要な課題である。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	全学部・学科において必修化を実現済みであるため、アンケート項目から削除した。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	全学部・学科において必修化実現済み。

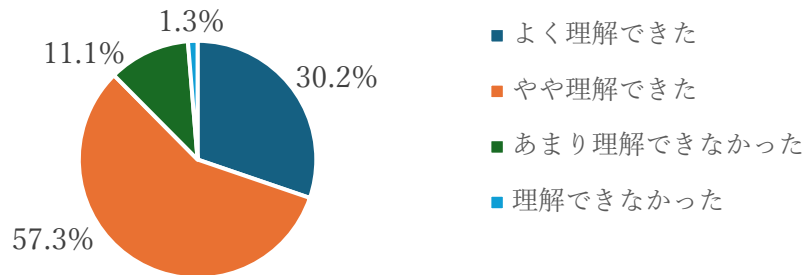
自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和4年度からのプログラム開始であり、プログラム修了者としての卒業生がいないため、評価対象外。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	外部評価委員：阿部貴氏（（株）SIマネジメント 代表取締役※SI=システムインテグレーションの略称） （於：令和8年5月13日開催：自己点検・外部評価委員会、DS/AI教育推進部会、合同会議） 本プログラムがデータサイエンスの基礎スキル（データの見方、データを読み解くこと等）を身に付ける目的は満たせていると言える。データサイエンスのプログラムの評価に関する議論であるに関わらず、本取り組みのアンケート分析にデータサイエンスのアプローチが見受けられない点は大変残念である。アンケート内容の粒度を細かくし、課題が抽出できるレベルにしたほうが良いと思われる。 また、産業界からの視点でデータサイエンスのツールについて質疑があったが、業界や会社によって使用されるツールは異なり、“ツールが使える”＝“採用”ということはない。むしろ、インサイトの導出やデータからの要因特定といった、「データから課題を見出せる」人材が好まれる。プログラミング言語や開発ツールが時代に併せて変わっていったことと同様で、データサイエンスのツールについても時代とともに今後変化していく傾向があり、ツールの使い方に関する授業に意味はないと考える。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	2025年度の授業アンケートの結果によると、数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」に対する学生の理解度は着実に向上している。具体的には、問2の「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」についての理解度を問う設問において、「よく理解できた」と回答した割合が、前年度の27.9%から31.1%へと増加した。これに「ある程度理解できた」の55.6%を合わせると、全体の86.7%の学生が学修の楽しさや意義を肯定的に捉えており、学修に対する動機付けが改善されたと言える。 シラバスに基づき、実社会で活用されるデータの読み方やAI活用の最新動向を学ぶことで、学生は学修内容と社会との繋がりをより具体的に認識できるようになったと考えられる。特に、PBLやプレゼンテーション等の能動的な学びを取り入れた実習を通じて、自らデータを分析し伝えるプロセスを経験したことが、学ぶ楽しさの発見に繋がっている。 加えて、選択科目として統計学を開講しており、毎年度300～400名程度が履修している。基礎プログラムで得た学びを発展的に深める機会を用意することで、学生が数理・データサイエンスを継続的に学ぶ意欲を高めている。 さらに、Tableauを用いたデータ可視化のパイロットスタディも実施しており、データを「読む」だけでなく「伝える」体験を通じて、学ぶ楽しさやデータ活用の意義を実感できるよう工夫している。 一方で、意義を十分に理解できていないとする否定的な回答も1割強存在しており、習熟度の二極化への対応が課題として浮き彫りになった。今後は、すべての学生がデータサイエンスの重要性を自分事として捉えられるよう、さらなる教育内容の充実が求められる。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	2025年度のアンケートでは、87.5%の学生が内容を肯定的に評価しており、教育水準は概ね維持されていると言える。しかし、約1割の否定的な回答や習熟度の二極化という課題に対し、内容の質を保ちつつ「分かりやすさ」をさらに向上させる取り組みが不可欠である。 具体的な方策として、シラバスに基づき、実社会で活用されるデータの読み方や、ExcelやPowerPointを用いた実践的な演習を重視している。理論の講義と並行して、個々のPCを用いた実習を行うことで、抽象的な概念を具体的に体験しながら理解させる仕組みを構築している。また、社会の変化や生成AI等の技術発展を適宜授業に反映させており、「AI利活用の最新動向」や「情報モラル」をカリキュラムに組み込むことで、学生の興味を惹きつけつつ、教育内容を継続的に見直している。 さらに、PBLやプレゼンテーション等の能動的な学びを導入し、学生自らがデータを分析し伝えるプロセスを経験させることで、深い理解と定着を図っている。提出されたレポートへの適切な解説などの多角的なサポート体制を整えることで、学生個々の習熟度に応じた、より効果的で分かりやすい教育の実現を目指していく。 今後は、学生が入学後から卒業後までを見通して学修を進められるよう、将来を見据えたロードマップを活用しつつ、社会の変化や生成AI等の技術発展を踏まえて継続的に内容を改訂していく方針である。 また、改善方策の検討に当たっては、卒業時アンケートにおけるICTリテラシー関連項目（回答率85%超）の結果データについても、引用・活用する方向で検討を進める。

2025 年度 データサイエンス授業アンケート結果(2026 年 1 月実施)

問 1 数理・データサイエンス・AIの講義内容を理解できましたか？

回答	N	%
よく理解できた	326	30.2%
やや理解できた	618	57.3%
あまり理解できなかった	120	11.1%
理解できなかった	14	1.3%
有効回答数	1078	100.0%

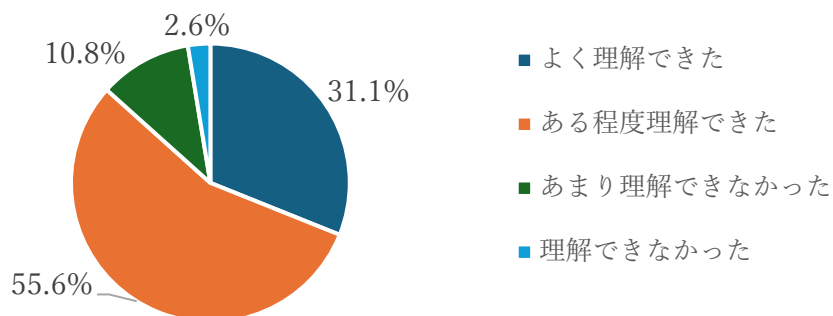
問1 数理・データサイエンス・A I の講義内容を理解できましたか？



問 2 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」について理解ができましたか？

回答	N	%
よく理解できた	335	31.1%
ある程度理解できた	599	55.6%
あまり理解できなかった	116	10.8%
理解できなかった	28	2.6%
有効回答数	1078	100.0%

問2 数理・データサイエンス・A I を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」について理解ができましたか？



(注:各項目の%は小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、合計は必ずしも 100%にはならない。)